

金遠壽
說金集
五

金蓮壽小說全集 五

筑摩書房

金達壽小説全集五

一九八〇年九月二十五日第一刷発行

著者 金達壽

発行者 布川角左衛門

発行所 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二一八

電話 (営業) 元一七五二 (編集) 二四一七二
振替 東京一四二三

印刷所 三松堂

製本所 鈴木製本所

装幀者 田村義也

金達壽小說全集

第五卷

第五卷 目次

日本の冬……………5

密航者……………163

解題……………325

〈著者うしろがき〉

わが文学と生活(六)「民主朝鮮」と「新日本文学」のこと……………331

日
本
の
冬

その一

八巻啓介は、まえにきたときとはかわっている女中にもちびかれて、玄関わきの応接間へとおった。課長はまだ、役所からかえってきていないのではないか。

「どうぞ——。こちらで、お待ちになって下さい」

啓介は、そこにある椅子の一つに腰をおろした。

何となく、また待つのかあ、と思いながらたばこを一本とりだし、左の親指の爪にあててぼんぼんとはねてから吸いつけた。火をとったマッチ箱を卓の上に投げだしたが、思いかえしてかくしへもどした。

あたりをみまわした。一年ほどまえ、彼が、叔母の奔走によってようやく法務府入りがきまったとき、この夫人にも別に一度あいさつを、といってきた叔母や母のすすめではぶ訪ねてきたときと、別に変ったところはない。課長森田の、南方司政官時代の土産だというマレーの風景を描いた油絵の額もそのままだ。

国務大臣にながしと肩書きのついた落款のある「国体護

持」の横額が一つ、表装されてとどけられてきたばかりらしく、その棚の上におきっぱなしになっている。それはこの家の若い夫人、朝子の怠惰をものごたるものであろうか。

一年まえのそのとき、かえりぎわになって、そこで、夫人はいきなり啓介の肩に両手をかけてきて、接吻をこころみたのであった。彼も、夫人の腰にまわした両腕をしばって、力をこめたのおぼえている。

扉のノブがうごいて、茶をもってきた女中のうしろから、夫人の朝子が入ってきた。

「ああら、いらっしゃい。しばらく——」

啓介は立ち上って、だまっておじぎをした。

「どう、東京は？ やっぱり東京の方がいいでしょう。よかったわね」

朝子は南天萩の模様をうかした派手な着物の身体を、ソファに、横に投げだすようにして坐った。

「はあ、おかげさまで……」

「今西さんもよろこんでいらしたわ。これから、ベックをナイトにして大いにはりきろうって」

「何ですか、ベックというのは——」

「あら、ご存じないの。グレゴリー・ベックというアメリカの魅力的な男優さんよ。あなたは、そのベックにそっく

りなのよ。だから、私たちのベック。——」

朝子は、眼を細めた。

「目黒の叔母は、まだ、ぼくが東京へきていることを、知らないはずですが……」

「おっほは……。あなたも、なかなか社交辞令ね。いま、はあ、おかげさまで、などとおっしゃっておきながら。……あなたは知らなくても、今西さんと私とはちゃんと知っているのよ。あなたがこんど東京へ転動になったのも、それは私たちの演出なんだから」

「そうですか。それは……」

「礼にはおよばないわ。だけど、いったん地方へでちゃうと、東京へかえるのはなかなか大変なんですってね。あなたはまたどうして、あんなBくんたりまでいっちゃったの」

「何も、好きでいったんじゃないですよ。あれからすぐにB支局への辞令がでて——。しかし、急に、東京へかえって家で待機しているというこで、三日まえからきて待っているのですが、まだ本局勤務となるかどうかは……」

「大丈夫よ、こんどは。だって、きょう、うちの森田に呼ばれてきたんでしょ」

「ええ、そうです。課長は、まだ、おかえりになっておりませんか」

と、啓介はきいた。

「まだ。——きょうは土曜日、どうせまた赤坂かどこかでしょうけど、でも、きょうはあなたを呼んであるんだから、いったんはかえってくるわね」

「お忙しいんですね」

それだったら、もう少しおそくきてもよかったなあ、と思いがら八巻啓介はいった。それまでこの有閑女の對手をしなくてはならないのかと思うと、うっとうしい気がした。

また、一年まえの、あのようながあつては困る。啓介は、たばこを吸いつけた。

「お役所の忙しいことは、たしからしいわ。ほら、なんというの、あのモグラさんたち」

「共産党の、潜行幹部たちのことですか」

「そう、そう。そのセンコウカンブ、あれ以来よ。お役所の方でも、どんだん人をふやしているそうじゃないの。だから、あなたのこんどの転動も、うまくその波に乗ったのよ」

「ふやしていることはふやしているでしょう。地方の支局でさえ、この一年ばかりのあいだにずいぶんふえているんですから。何しろ、左翼を相手とするということは、ずいぶん人数を必要とすることですからね。特審局もこんどは、

いずれ近く昇格して一庁となるか、省になるかするそうです」

「そう。でも、それはまた、みんなその左翼さんたちのおかげなのね。考えてみると、私はなんだか少し変な気がするわ」

「何がです？」

「だって、そうじゃないの。その左翼さんたちのおかげで、私たちはお役所からお金をとってパーティをしたり、また男の人たちは出世をしたりしているのに、一方で、その仕事というのは、その左翼さんたちを追っかけまわして、なくそうとすることなんだから」

「いまのところ、なくそうとまではしないんですがね。まあ、結局はそうでしょうけれど——」

「結局そうだったら、おなじことじゃないの。でも、何だか、ちょっとロマンチックね。追いつ、追われつ、私、そのセンコウカンブの誰かに会ってみたいわ」

「当事者たちにしてみれば、ロマンチックどころじゃありませんよ。会ってみたいって、いつも新聞に写真がでているじゃありませんか」

「あら、写真じゃつまらないわよ。私の家に誰か一人逃げてきたら、私、だんぜんかくまって上げる」

「冗談じゃないですよ。特審局の課長といったら、向うに

とっては、まさに敵そのものですよ」

もちろん朝子としても、それをまじめにいつているわけでないことはわかっていた。だが、それとは別の角度から、啓介はしだいに腹が立ってきた。

「どうやら、その敵さんがかえってきたようね。それにしては、五尺そこそこの、ずいぶん貧弱な敵ね」

朝子はソファに坐ったままで、耳をすますようにしていた。

外で、車のとまる音がしていた。玄関の方へ足音が近づいてくると、朝子は、

「私たちの演出のことは、きつと知らん顔するにちがいないわ。うまくやるのよ」

と、片眼をちつつむってみせて、立っていった。

啓介は、自分もいっしょに玄関へでて出迎えたものかどうか、ちよつとまよう気持ちであったが、そのまま、そこに坐っていることにした。

「えい、勝手にしやがれ！」と彼は何の理由もなしに、一人で力んだ。

「おう——。これは、しょうがないなあ」

応接間へやってきた森田は、立ち上って彼を迎えた八巻啓介よりも、その棚の上におきっぱなしにしてある国務大臣なにがし落款の「国体護持」の表装の横額の方が、さ

きに眼にとまったらしかった。

彼は棚の方へ歩みよっていくと、

「おい、朝子、朝子」

と、横額をとって呼んだ。

立ち上って、あいさつのことばをのど元までだしかけていた啓介は、もう一度坐ったものかどうか、また、まよった。かくしからたばこをとりだしたが、急いでやめた。

「はい。——」

朝子が、やっと扉を引いて顔をさしだした。

「これを、こんなところへおきっぱなしで忘れていては困るね。八巻君だからいいが、これがほかの人だったらどう思うかね」

「きのうとどけられてきて、……はあい、向うへもっていきます」

朝子は首をふって、おどけたように笑いながら、横額をうけとって去った。——なるほど、そういう心づかいからか、と思つて啓介は立っていた。

「いやあ、うむ——」

と、意味のないことをつぶやきながら、森田はそこへきつて坐った。

「大変、ごぶさたいたしました」

啓介はそれだけを書いて、彼も坐った。さつき用意した

あいさつのことばは、どこかへ引込んでしまったのだ。

「君を、ぼくは修業のつもりで、それからある考えもあって、しばらく地方へやっておいだのだったが、どうだったね、Bでの勤務は——」

「ええ、いいべんきになりました」

啓介のそのことばには、自分としては、複雑な意味がこもっていた。彼は、もう二度とああいふ勤務はしたくないものだと思った。

「うむ、誰でも一度は地方へでてみるものだ。——では、ぼくはこれからまたでかなくてはならんから、さっそく用件を片づけるとしようか」

森田は閉っている扉の方をちらつとみて、身を乗りだすようにしていった。

「はあ」

「どうだね、八巻君。君はこれから本府で、ぼくの直属の部下として働いてもらうが、それに、別に、異存はないね」

「はあ、ありません。よろこんでしがいます」

「うむ、ぼくも君のような優秀な青年を部下に加えることができてうれしい。では、さっそく任務についてもらう。きょう、君の顔を知られないようにして、本府ではなしにわざわざ家へきてもらったことでわかんと思うが、君はば

くの直屬として、本府へは登庁しない一人として勤務してもらいたいのだ。つまり、特捜だ。わかるね」

「外勤、"歩き"です」

啓介の顔にはさつと曇りがさしたが、彼は、つとめて何気ないふうをよそおった。

「そうだ。君にこれから大いに期待してのことだが、"線工作"にあたってもらいたいのだ。こんどの朝鮮戦争で、アメリカの腹はもうはつきりときまっている。いざというときに備えて、奴らを一人もらさず捕捉しておかなくてはならぬのだ」

「……」

「あすは日曜だが、午後五時半、新宿駅の裏口で、ある男に会いたまえ。彼は共産党K地区の委員をしている。——ああ、そうか。はっはは……、彼は君の同僚、先輩だよ」

八巻啓介は、新宿駅の長い地下道を、ラッシュ・アワーの人々のあいだにはさまって、東口へ押し込まれた。改札口の上にさがっている時計をみたが、課長の森田からしめされたその売店の横へいつて立つ五時半までには、まだちょっと間があった。

それは、以前からの彼のくせであった。学生時代をつうじて、彼は、それが気のすすまぬ集りであったり、また気

に食わぬ奴と会わなくてはならないばいなど、かえってその時刻よりも早めにそこへいつている。これは何事にも積極的に生きていくタイプの人間に備わった一つの美德であるというべきであったが、しかし、それが啓介には、そのままあてはまるものかどうか。——

啓介はすることもなくその辺をぐるっと一まわりしてくと、駅の建物にくっついている小さな売店で、夕刊を二つばかり買った。やはり誰かを待ち合わせて立っている若い女や男たちにまじって、彼も、その売店横の柱によりかかって立った。

みんなそれぞれ、あんまりみっともないかつこうじゃないなあ、と思いながら啓介は開いた新聞に眼をおとした。まず、朝鮮戦争の戦況を報じる大きな活字が眼につくのは、それは、このごろの新聞をみるものの誰もが経験していることであった。

去る九月十五日、仁川上陸に成功したアメリカ軍は首都の京城を奪還したが、しかし同時に、洛東江戦線はじめ南部一帯に散開していて後退を開始した北鮮軍の十万は、忽然と一夜のうちにそこから姿を消してしまったというのであった。どうしてそういうことができるのか、啓介にはまったく理解しがたいことであったが、それを、アメリカ側の従軍記者が報じていた。

アメリカ・国連軍は三十八度線を越えて、引きつづき進撃をしていた。北鮮軍が急に姿を消してほとんど後退しているらしいということも啓介にはよくわからないことであったが、それで、はたして、ソ連と革命中国とが黙ってみているかどうか、それが啓介のこのごろの新聞をみる焦点であった。ソ連も中共も、それについて何か声明したというようなことは、みあたらなかった。一人あくせくしているようなアメリカにくらべて、無気味な沈黙であった。

ソ連と中共とがもし北方から参戦してくれば、それはもう、第三次世界大戦はまぬがれないと思われた。そうなれば——、と啓介は思った。親父はいよいよ、完全に行方不明ということになる。いや、親父ばかりじゃない、こちらもどうなるかわかったものではない。

啓介の父、陸軍大佐八巻啓之助は、前大戦の末期、中国にいてそのまま行方不明になっていた。ソ連か中共か、どちらかで戦犯に問われているのかも知れない。

その思いが啓介の学生時代にも、暗い陰となって反映した。戦後の学生生活といえ、それは、そのまま学生運動の生活であった。しかし、彼はそれをも横目でみてすごした。

いわゆる竹の子生活をしている、母と婚期のおくれた陰気な姉との家庭であったが、啓介は大学を卒業しても、そ

のままぶらぶらしていた。それをみかねた大蔵省の課長夫人である叔母の奔走で、彼は法務府特審局入りをした。

そうだ、あれが、おれのこの出発点だったのだ、と、啓介は虚空をみつめるようにして思った。そのとき、彼は左の肩をこつこつと叩かれた。

みると、ハンティングを目深にかぶった男が一人いて、うつすらと笑いながら立っていた。啓介は、鼻の横に大きなほくろのある顔を一目みて、いやな奴だ、と思った。

「辻井ですよ」

と、彼は、変に押しつぶしたような声をだしていった。と、同時であった。

「ああ、やあ、これは——。こんにちは、どちらへ……」

辻井は、急に横の方を向いて、ろうばいした声で、あいさつをしはじめた。

對手は、駅の構内をでできた二十前後の、うすい水色のワンピースをきた女であった。彼女はとおりのすがりに、うしろから辻井をみつめて声をかけたようであったが、啓介は気がつかなかったのだ。

彼女は快活なようすで、ちょっと辻井をからかうようなかっこうをしながら、唇をうごかしていた。その彼女の左右を、構内からでできた人々がながれつづけており、なかにはいろいろに着飾った彼女とおなじ年ごろの娘たちも何

人かみえたが、啓介には、ハンドバックもなしに書類入れの紙袋一つを手にした、質素な身なりをしている彼女がひどく印象的にみえた。

小柄で、貧弱な身体をしている辻井は、背の高い彼女をみ上げるようにして、何か、しきりと話していた。彼は啓介とそこで会っていることを彼女には気づかれまいとしているようで、彼女を、だんだんと向うの方へ押していっていた。

彼は、森田課長から会えといわれた、共産党のK地区委員をしているという、辻井次夫に間違いなかった。彼の方はこの四、五日のうちに、森田の命令ですでに啓介の顔をおぼえて知っているということであったが、啓介の方では、彼のその鼻の横のほくろがおしえられた目じるしであった。

「いや、どうも——。おれの地区の細胞員の娘でね、こんなところで会おうとは思わなかったものだから……」

やがて、辻井は彼女とわかれ、なおもしばらくのあいだそこに立って、向うの人混みのなかにその姿がみえなくなるのをみさだめてから、近よってきていった。

「八巻です——」

と、啓介はいった。

「うむ、知っている。じゃ、いこうか。こんなところにい

ると、また誰にみつかるかわかりはしない。その辺の飲み屋へでもいって話すことにしよう」

そういつて辻井は、さきに立って歩きだした。人混みのなかを、小柄な彼は器用に身をかわしながら、四谷の方へ向って歩いていった。

啓介はそのあとから、彼につかず離れず、ゆっくりとした足どりで歩いていきながら、そうだ、あれがこのおれの出発点だったのだ、とさいぜん一人で思ったことを、また思いかえた。彼は特審局へ入るまでは、そこが何をしているところであるか、ほとんど知らなかったといつてよかった。

公職追放令の運用に当たるところだ、ぐらいにしか考えていなかったのだ。また、そうとしかきかされていなかった。それが、彼はこの一年ばかりのあいだ、B支局で、その地方の共産黨員や、朝鮮人の尾行ばかりをさせられた。

それは卑屈・卑怯な、まったくいやな仕事であった。彼は、他の支局員とはまた別な意味で、中央への転動を強く望んだ。すれば、内勤に転じられるとばかり思ったからである。

いやな思いをしながら、若い叔母に何度も手紙をかいわたのんだのも、そのためであった。そして、それはかなえられた。

ところが、今度はいっそう——、というよりも、はっきりといってしまうと、そのS、スパイ以外ではない「線工作」にしたがわされることになったのだ。おれはいったいどこまでおちていくのだ、と啓介は思った。

辻井次夫は四谷近くの、裏通りの、とある小料理屋の前に立ち止って、手をふっていた。

「おい、何を考え込んで歩いているんだ。少し早く歩けよ」

といつて、辻井はその小料理屋ののれんをわけて入っていった。のれんには、小その、とかかれてあった。

二階へ上った。辻井はすでにそこがなじみらしく、女中から親しげに何か話しかけられながら、廊下のはずれの小部屋へとおされた。

「——例によって、でしよう？」

さっきの女中が酒、肴をはこんできて卓にならべおわると、辻井の顔をのぞき込むようにしていった。

「ああ、しばらく遠慮していてくれ」

「はい、はい。ツーさんはいつも密談ね」

「そうさ、人間というものには、誰にでもそれぞれ秘密があるものだ。世の中は、この秘密のやりとりでうごいてるものさ。はっはは……」

辻井は向い合って坐っている啓介をみて笑った。啓介は、

そのことばは、彼にしては少しできすぎていると思って苦笑した。

「ところで」

と、辻井は女中が盆をもって去ると、銚子をとり上げていった。

「課長からいろいろきいてくれたと思うが、君は、これからおれの手足となって働いてもらうんだ。まあ、共産党K地区委員辻井次夫の腹心、というところだな。今夜は一つ、ゆっくりやろう」

啓介は、つがれた盃を、ぐいと飲みほした。そして胸にしみわたるそれを味わいながら、おれはおちた、落下した——、と思った。

「うむ、なかなか飲みっぷりがいいじゃないか。君も、いよいよ中央入りができてうれしいわけだな。B支局では、いままで何をしていたのだい。何しろ地方じゃ、いくらあくせくやったって、みてくれる奴がちがうからな。その点、何とிட்டって、成績をあらそうのはやっぱり中央だよ」

「ぼくは、辻井さんに一つききたいことがあるのですが——」

「何だね？」

「あなたは法務府へ入ったのがさきだったのですか、それとも共産党へもぐり込んだ方がさきか、どっちだったのですか」